

◇5月の天文暦◇

日時	記事
1 20	下弦
6 14	立夏(太陽黄経 45°)
6 20	月最遠
10 0	朔
12 1	水星外合
14 21	海王星 衝
17 14	上弦
21 1	火星月の南 2° 通過
22 3	小満(太陽黄経 60°)
22 11	月 最近
24 5	望
31 11	下弦



る物と思われる。②の影響は、倍率を上げて天体とバック・グラウンドとの見掛けの明暗差を小さくすることによって、かなり除去することが出来る。金星の観測では他のコントラストのある惑星の場合と違って望遠鏡の分解能よりも散乱光、反射面等によるコントラストの低下の影響の方が重大な影響を与えるものと思われる。使用倍率は(惑星観測の場合はすべて同じ事であるが)口径を耗で表した値よりも大きい倍率を使う必要がある。もしも、シーイングが悪くてこれより小さい倍率を使う場合には、接眼鏡の射出瞳の所に約1耗のシボリをつけると良い。金星の様に明るい天体ではこの径を0.5耗まで小さくしても良い結果が得られる。

写真観測——眼視に比較して分解能にて劣るが、早く且つ信頼性があり、測光、位置測定に客観性が期待出来る。模様は短波長程よく写り露出は少なくとも1秒より長くする必要がある。3800Å 以下になると眼視スケッチの模様とよく一致するものが得られる。

写真は花山天文台の60種惑星望遠鏡で1964年3月に紫外域で撮影されたものである。(合成焦点距離:43米, フィルター:マツダ UV-D2, 露出:2秒, フィルム:フジ・ネオパン SSS, 現像:D-19, 20°C, 4分)
(中井善寛)

金星の観測

宵の明星・金星もようやく直径が15秒に達し光度も-3.5等と明るく、見頃となって来た。東方最大離角は6月21日、最大光輝は7月24日である。今回は模様を観察の仕方について簡単に書いて見たい。

眼視観測——金星のきらめく表面を見ると、非常に小さなコントラストの模様が僅に認められる。その見え方もリムからターミネーターにかけての強い明暗差によってはっきりしていない。そこで、観測者は模様を判別するために表面をなめまわす様に視線を動かさねばならない。見掛けの明暗模様には2種類ある。①ターミネーターに直交する様な感じで(太陽直下点から放射状に)僅に暗い地域、と②明るいリムに沿って見える暗い地域であるが、①は実在のもので②は生理学的な効果で見え

東京における日出入および南中(中央標準時)

5月	夜明	日出	方位	南中	高度	日入	日暮
日	時分	時分		時分		時分	時分
1	4 16	4 50	+10°0	11 38	69°2	18 27	19 1
11	4 5	4 40	+22.6	11 37	72.0	18 35	19 10
12	3 56	4 32	+25.6	11 37	74.4	18 43	19 19
31	3 50	4 27	+27.9	11 38	76.2	18 50	19 27

各地の日出入補正值(東京の値に加える)

(左側は日の出, 右側は日入に対する値)

分	分	分	分	分	分
鹿児島 +45	+29	鳥取 +23	+22	仙台 -10	+1
福岡 +42	+33	大阪 +19	+15	青森 -15	+7
広島 +32	+27	名古屋 +12	+10	札幌 -23	+11
高知 +29	+20	新潟 -2	+7	根室 -41	-6

